

エベネゼル緊急基金
出エジプト作戦



EBENEZER
OPERATION EXODUS

故郷の地へ 帰還の 呼びかけ

「わたしは、あのベテルの神だ。あなたはそこで、石の柱に油注ぎをし、
わたしに誓願を立てた。さあ立って、この土地を出て、あなたの生まれ
た国に帰りなさい。』」創世記 3 1 章 1 3 節

故郷へ帰還の呼びかけ

新しい国際議長

INTERNATIONAL CHAIRMAN

「監督は神の家を管理する者として、非難されるところのない者であるべきです。…人をよくもてなし、善を愛し、慎み深く、正しく、敬虔で、自制心があり、教えにかなった信頼すべきみことばを、しっかりと守っていなければなりません。…」テトス1章7-9節

2023年1月に、この度私はエベネゼル国際議長の働きを、愛する兄弟であり理事会のメンバーであったフィリップ・ホルムズバーグに委ねることになりました。今まで私はこの働きを通じて主に仕えることができたことは、本当に特権でした。どのような立場であれ、主が特別な時に恵みによって召してください、主が明確にフィリップを召し出し整えてください、今この時に国際議長としての働きを担ってくださることは喜びです。

フィリップと彼の妻のウラは、スウェーデンに住んでおります。彼は国際エベネゼルチームの中において、バルティック・ノルディック理事会と、2014年からは国際理事会のメンバーとして仕える者としてよく知られていました。教育資格としては、フィリップはアジアにおいて盲学校の校長をされていたことがあります。その後スウェーデンに戻り、20年にわたって教育界において校長としての働きをし、その後単立教会の牧師をされていました。牧師に任命されてから初めて語った説教は、主がユダヤ人とイスラエルの国に対して持つておられる預言的な目的についての説教でした。

フィリップは賜物豊かなリーダーであり神のみことばの教師でもあります。彼はエベネゼルの祈りのリーダーたちが励まされ、整えられ、国々において共通の目的のために協力するという情熱を持っていました。それを通して、エベネゼルの祈りにおける一致と献身がさらに強められてきています。

私たちは、フィリップの主との成熟した歩みを高く評価いたします。国際理事会は、今後彼のしもべの心によるリーダーシップの元で栄えることでしょう。フィリップがこの新しい責任の立場へと入る中、彼とウラとそのご家族をぜひ祈りに覚えていきましょう。

ピート・スタッケン Pete Stucken

「わたしは、あのベテルの神だ。あなたはそこで、石の柱に油注ぎをし、わたしに誓願を立てた。さあ立って、この土地を出て、あなたの生まれた国に帰りなさい。」創世記31章13節

この言葉は、ヤコブが20年間パダンアラムに逃亡した時期の終わりに、彼に語られた言葉です。彼は明確な命令を受けました。それは誤解のしようのないものでした。「さあ立って、この土地を出て、あなたの生まれた国に帰りなさい。」

立って、出て、故郷へ帰ること。これはとても簡単なことのように聞こえます。もしこの命令が20年前にヤコブが一人でいた時に語られていたならば、簡単だったことでしょう。しかし今や、彼には大家族がありました。

妻たち、多くの息子たちも。このようにして、彼は大いに富み、多くの群れと、男女の奴隷、それにらくだとろばを持つようになったのです。(創世記30章43節)

最初の7年間は早く過ぎ去りました。「ヤコブはラケルのために七年間仕えた。ヤコブは彼女を愛していたので、それもほんの数日のように思われた。」(創世記29章20節)しかしその次の7年間は長く感じたことでしょう。そして私の想像によれば、メソポタミアで過ごした最後の6年間はそれよりもさらに長く感じたことでしょう。彼の義理の父が10回にも渡って報酬を変え、さらに悪いことに、その地の人々のヤコブに対する態度が変わってしまったのです。「ヤコブはラバンの息子たちが、「ヤコブはわれわれの父の者をみな取った。父の物で、このすての富をものにしたのだ」と言っているのを聞いた。」(創世記31章1節)

そこで主はヤコブに語りかけました。「ヤコブよ。」そして、ヤコブは「はい。私はここにおります。」と答えることができたのです。(創世記31章11節)今や彼は喜んで御声に聞き従う用意ができていました。神様は、ヤコブが逃げた時にはじめにヤコブがした誓いを思い起こされました。「…「神が私とともにいられて、私が行くこの旅路を守り、食べるパンと着る衣を下さり、無事に父の家に帰らせてくださるなら、【主】は私の神





となり、石の柱として立てたこの石は神の家となります。私は、すべてあなたが私に下さる物の十分の一を必ずあなたに献げます。」(創世記 28 章 20 - 22 節)

そして長い年月の後に、ヤコブは主の御声に聞き従い、自分の誓いを果たす用意ができました。そして、立ってこの地を出て、家族の地へと帰る準備ができたのです。「彼は自分のものをすべて持って逃げた。彼は立ち去って、あの大河を渡り、ギルアデの山地の方へ向かった。」(創世記 31 章 21 節)

今日、私たちは、ユダヤ人たち、すなわちヤコブの子孫たちが、散らされた地を出て、先祖の地へ帰るように語られている主の声に、「はい、私はここにおります。」と応えることができるように祈っています。

ヤコブは主へ誓いを立てる前に、神様はすでに彼に約束を与えておられました。

「見よ。わたしはあなたとともにいて、あなたがどこへ行っても、あなたを守り、あなたをこの地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを成し遂げるまで、決してあなたを捨てない。」(創世記 28 章 15 節)

また、神様はヤコブに、地上から天まで届く梯子と、み使いたちがその梯子を上り下りするという夢を与えられました。そして、主はその上に立たれてこう言われました。「わたしは、あなたの父アブラハムの神、イサクの神、【主】

である。わたしは、あなたが横たわっているこの地を、あなたとあなたの子孫に与える。あなたの子孫は地のちりのように多くなり、あなたは、西へ、東へ、北へ、南へと広がり、地のすべての部族はあなたによって、またあなたの子孫によって祝福される。」(創世記 28 章 13, 14 節)

これを通して主はアブラハムとイサクに与えられた約束を更新されたのです。神様はヤコブにこの約束が有効であると個人的に確認され、その祝福は世界中のすべての家族、民族、言語の民に届くと約束されたのです。主はご自分のみことばを見張っておられ、覚えておられ、成就されます。神様のみ使いたちは今も天と地の間を上り下りして、ユダヤ人がイスラエルへ帰還するために、導き、助け、守ってくださっているのです。

ユダヤ人に対する国々の態度は現在悪化しています。時代がさらに混乱し、ユダヤ人にとって危険になっていく中、彼らが様々な方法によってイスラエルへ帰還するのを助けるために、主は、クリスチャン達や私たちのような団体を用いてくださっています。ヤコブは自分の誓いの中で、「食べるパンと着る衣」について語っていました。希望のメッセージをユダヤ人の家族に伝えることはよいことです。私たちは主が開いてくださる国々において、このことを続けていきたいと願っています。主が私たちに恵みを与えてくださり、実質的な支援とメッセージをたずさえていくことを長年させていただいていることは、大きな祝福です。

ウクライナにおける戦争を通して、私たちは実質的な支援をする機会が多く与えられました。今こそ主は私たちのユダヤ人に対する心と献身を試しておられる時です。私たちは、ウクライナや他の場所、またイスラエルにおいて、彼らの実質的な必要を満たす準備ができているでしょうか？主は私たちに、見る目、聞く耳、そしてユダヤ人の必要を理解する心を与えてくださっていると信じています。それは、主の召しに従って私たちがこの時代に主に仕えるためです。

国際



フィリップ・ホルムズバーグ
Philip Holmsberg
国際理事会議長



希望の光

ウクライナ



ヤンヤ
Yanya
ウクライナチーム

ユダヤ人を支援するために、私たちは何千キロもの道を車で走ります。時には、非常に道が悪いところもあります。ウクライナでの危険な状況の中でも、エベネゼルチームは、ユダヤ人への敵意のある場所から逃げてもっと平和な地域に住んでいるユダヤ人難民を探しています。私たちが訪れた家には、しばしば電気が通っていません。しかし、私たちが彼らに分かち合う時、彼らの心に、神の光、希望の光があふれるのを見えています。

悲しいことに、戦争によってすべての人々に影響が及んでいます。この困難な時代に生まれた赤ちゃんもいます。私たちは、ハルキウ出身のオクサナ家族に出会いました。

オクサナは、彼らの一番下の息子が、2022年2月21日に生まれたと教えてくれました。家に帰って平和に快適に子育てをするはずでしたが、彼女と二人の小さな子供たちは、そこを逃げて他の人の家の地下室へ避難しなければならませんでした。なぜなら、彼らの町が激しい攻撃を受けていたからです。オクサナは、新生児のための必需品や、ベビーフードや水なども手に入れることができませんでした。彼らは3月28日までその地下室で生活せざるをえませんでした。まだその間、夫や親戚ともまったく連絡を取ることもできなかったのです。

オクサナは言いました。「地下室には、他にも何人かの親子がいました。私の子供たちが一番年下でした。(長男は2歳、その下の子は生まれたばかりでした) 毎日のように、私たちは

外に出ては水や食べ物を探しました。神様は親切な人たちと出会わせてくださり、自分たちの持っているものを私たちに分け合ってくれました。

ある日、外に出ると、また砲撃が始まり、砲火が町に下ってきました。私は何人かのボランティアに助けられて、避難場所に行きました。私は取り乱しました。なぜなら、私の子供たちが地下室に残っていたからです。感謝なことに、ウクライナの兵士たちが、命の危険を冒して私を子供たちのところに車で連れて行ってくれたのです。

私たちがその家に着くと、私は気を失ってしまいました。なぜなら、家が破壊されていたからです。回復した後、ボランティアと兵士たちが何人かで地下室への通路を掘っているのを見ました。なんと、地下室は破壊されていなかったのです。そのことを知った時、私の心は言葉に表せない喜びと安心でいっぱいになりました!

その後、私たちは避難場所へ連れて行かれました。そこでの状況は、以前よりずっと良いものでした。そこで、ある日、私は夫の声を聞いたのです! 戦争が起こってから、私たちは全く連絡が取れない状況でした。ですから、私たちは再会した時、ともに喜んで泣きました! 私たちの家族の再会を目にして、泣いている方もいました。私の夫はボランティアになって、市民の避難を助けていたのです。

写真:
オクサナとその家族
ヤンヤとビクトルとともに
彼らから支援物資
を受け取り、アリヤーに
ついての情報を受けて
いる。





その直後、私たちの家族はポルタバに避難しました。そこは砲撃がハルキウほど激しくない場所でした。

今日あなたが私に電話をかけてくれて、会いましょうと言ってくれました。イスラエルへ行く機会について話してくれてありがとうございました。夢のようです。」

オクサナの目には、希望の光がありました。そして家族はみな、人道的支援物資とエベネゼルチームが分かち合ったメッセージにとっても感謝していました。家族はみな、私たちが別れを告げる時、ほほえんでいました。オクサナと彼女の夫は、励ましの中で書類の準備を始めました。彼らはできれば早くにイスラエルへ帰還したいと願っています。

将来を見据えて

私たちはある時、電気や暖房や水道やコミュニケーションの手段が全くない中で2日間生き残らなければならませんでした。それは、戦争が始まったばかりの最初の何日かでした。その後9か月大変な時が過ぎましたが、感謝なことに、私たちはまだ自由であり、生きており、堅く立って、前進を続けています！

今日、戦争のただ中でも、私たちの働きの実を見て、ユダヤ人がイスラエルに集められていることを喜ぶことができることは励みです！さらにもう一つのユダヤ人家族がすでにバンに乗り込み、ヨハネスが今まさにドアを閉めてワルシャワ（ポーランド）に向かうとこ

ろです。そこで彼らはアリヤーの申請をして、そこからイスラエルに飛び立つことになっています。突然誰かが私の名前を呼びました。それで私が振り返ると、そこには、なんとなく見覚えのある顔がありました。その人はこう言いました。「あなたは私のことを覚えていないかもしれませんが、私はあなたのことをよく覚えていますよ。ヤンヤさん。私はブラディミルです。あなたと何人かの外国人のボランティアが、何年も前に私たちの家族を訪問してくれたのです。」

私は、それで初めて会った時のことを思い出し始めました。それは、19年前のことでした。ブラディミルは当時イスラエルへの帰還に興味を示していませんでした。しかし今では、彼はこう言っています。「あれから長年が経ちました。ヤンヤさんが、私たちが帰還する時が来る、と言われたことは本当でしたね。また、それが困難な時にそれが起こるかもしれない、と言われましたね。そして今日、私たちは逃げて行かなければならないのです。私たちの子供たちも孫も平和な時にアリヤーしました。でも、私たち夫婦は今日彼らの後に続いていきます。そして今は、非常に困難で混乱した時です。」

神様はご自身の約束に対して忠実なお方です。この方に栄光がありますように！



用語解説

アリヤー(Aliyah):

ユダヤ人が約束の地、イスラエルに帰還することを意味します。

ユダヤ機関(Jewish Agency):

ユダヤ人の国際的機関。パレスチナにユダヤ人の本拠を設けるというシオニストの計画の対外機関。パレスチナへのユダヤ移民の監督、ユダヤ系経済組織の確立などに努める。

オリム(Olim):

イスラエルに帰還するユダヤ人

クリタ(Klitah)

吸収を意味し、イスラエルに到着したオリムたちの生活を確立させること。ヘブライ語の学び、就職、住居、学校、IDFへの従事など。

アリヤー & 飢えた人に食べ物を与える

ウクライナ



ヨハネス・バルテル
Johnnes Barthel
地域コーディネーター

「あなたがたはわたしが空腹であったときに食べ物を与え、渇いていたときに飲ませ、旅人であったときに宿を貸し、わたしが裸のときに服を着せ、病気をしたときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからです。』…

王は彼らに答えます。『まことに、あなたがたに言います。あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、それも最も小さい者たちの一人にしたことは、わたしにしたのです。』マタイの福音書 25 章 35 節—40 節

昨年ヨーロッパでの戦争が始まってから、何百万もの人々が家も、しばしば将来への見通しも失ってしまっています。その中には、様々な理由でまだイスラエルに帰還することができないでいる、何万人ものユダヤ人もいます。エベネゼルチームは、毎日のように停電や寒い部屋に住むこと、また、滑りやすい危険な道路を運転することなど、多くの困難の中でも、あきらめずに奉仕を続けています。

西ウクライナに到着するオリムの数が少ないということがわかると、私たちエベネゼルチームはすぐに戦争地帯へ向けて出発しました。困窮したユダヤ人家族に人道的援助物資を届け、アリヤーについてのメッセージを伝えるためです。現時点では、さらに700以上の食料ボックスを困窮したユダヤ人家

族に配布する予定です。

ウクライナへの継続的な支援によって、エベネゼルチームは過酷な冬の間にも働きを続けることができます。人間的には、あきらめたいという誘惑がきます。しかし、エベネゼルチーム全員は、神様の召しを知っています。ユダヤ人に洋服や食料、また眠るための暖かい場所を提供する時、彼らの目には喜びがあるのがわかります。その喜びが私たちの個人的な犠牲のすべてにまさる喜びです。

私は最近エベネゼルチームとともにウクライナに一泊する機会がありました。その何日後に、ルビブの教会で、この状況について聖書的な視点から分かち合うように招かれました。私たちのチームは、イスラエルを祝福することがどういう意味なのかを理解する他のクリスチャン達との交わりを楽しみました。

新しいアリヤーの道が開かれてきています。また、閉ざされた道もあります。私たちが理解しなければならないことは、戦争によって、常に状況に応じていく必要があるという事実を受け止めなければならないということです。

どうか、エベネゼルチームが疲れることなく、日々主によって強められるようにお祈りください。

2022年のアリヤーの数字が、23年間で最多になりました。

7万4千人ほどの新しい移住者が、95か国からアリヤーを遂げました。この数字は前年の2万8千人の移住者を大幅に上回ります。7万4千人のオリムの中で、5万8千人以上のオリムがロシアとウクライナからのアリヤーでした。

皆様のお祈りと支援に感謝いたします。



いにしえからの通り道

「【主】はこう言われる。「道の分かれ目に立って見渡せ。いにしえからの通り道、幸いの道はどれであるかを尋ね、それに歩んで、たましいに安らぎを見出せ。彼らは『私たちは歩まない』と言った。」 エレミヤ書6章16節

力、エネルギー、新鮮さ、強烈、などの言葉は、若者を表す言葉でもあります。学ぶ機会にあふれている時でもあります。

私たちは若いテモテを思い出します。彼は家族の中で知識を受け、その後使徒パウロを通して学びます。テモテは性格的には控えめな人物だったようですが、彼とルカはパウロにいつも同伴して働きをしていました。パウロの死後、テモテの働きはエペソの教会を導くものとなりました。

若い人々は教会の指導者としての困難な務めを果たし、信仰において教え、みことばによって生きていくために、導きが必要です。

教会にいる若者たちのために祈っていきましょう。神様が彼らを、尊敬に値する、自制心のある、健全な信仰と愛と忍耐を持っている人々によって取り囲んでくださるよう祈りましょう。これらの祈りが、私たちの愛する主の完全な喜ばしいみこころのうちに、世代から世代へと守りの壁となるように祈りましょう。聖霊の力によって、イスラエルの回復とアリヤ

ーについての啓示の種が、若者の心に急速に成長するように、またそれを通して、多くのとりなし手、ボランティア、コーディネーター、管理者、喜びを持ってささげる者が起こされて、神様の約束と永遠の契約が成就していくようにお祈りしましょう。

私たちの主が与えてくださったもっとも素晴らしい経験の一つは、二人の十代の青年が、心と力とたましいを尽くして神様を愛し、また情熱と信仰を持ってイスラエルを愛しているということです。ホンジュラス人のアロン(14歳)とメキシコ人のアブラハム(13歳)はラテンアメリカのユースグループEOEにおいて大きなインパクトを与えるでしょう。

私たちは、アロンとアブラハムが義の実を結び続け、主に栄光をお返しするようにお祈りを続けていきます。

ともに、詩編119編9節16節を宣言しましょう。

「どのようにして若い人は自分の道を清く保つことができるでしょうか。あなたのみことばのとおり道を守ることです。」

祈り



エンリケ & カティア・デ・サンティアゴ
Enrique & Katia De Santiago

EBENEZER INTERNATIONAL
Israel Tour 17-24 November 2023

Harbours & Coastland Tour

For more information
www.ebenezer-oe.org/events for TOUR & BOOKING details
email: israeltour@ebenezer-oe.org



EBENEZER
OPERATION EXODUS

KLITAH(קליטה) 吸収、統合、受容

イスラエル



ジュディス・ビナペル
Judith Vinapel
イスラエルチーム

アモス書 9 章 1 5 節には、神様がご自身の民をイスラエルへ返し、彼らをそこに植えると語られています。「わたしは、彼らを彼らの地に植える。彼らは、わたしが与えたその土地から、もう引き抜かれることはない。——あなたの神、【主】は言われる。」アリヤーの文脈において、Kitahについて、すなわち、その土地に受け入れられてその地に統合されることが、なぜ重要なことなのでしょう。

6 か月前に私はイスラエルのユダヤ人と結婚しハイファに引っ越しました。私は彼も彼の友人も家族も何年も前から知り合いました。しかしイスラエルに引っ越すことがこれほどの変化をもたらすものとは予想していませんでした。ドイツにいる家族にそれほど会えなくなる、赤いぶどうは高いのでいつも緑のぶどうを買うことなどはほんの一例ですが、毎日のようにいろいろな変化に適応しなければなりません。

私のイスラエルへの愛は成長し続けていますが、イスラエルへの愛と理解は深まっています。最近私はエベネゼルチームに加わりました。私たちの心



は、オリムがイスラエルの地に植えられることを強く願っています。神様が私たちの心を満たしてくださって、彼らを愛と歓迎の心で支援することができるように助けてくださっているのです。

しかし、イスラエルの地に植えられるためには何が必要でしょうか？家や学校や仕事を見つけることでしょうか？または、ヘブライ語を学ぶことでしょうか？古い生活を手放して新しい生活を受け入れることでしょうか？

新しい家を見つけたとしても、そこはほとんど空っぽです。では四人家族が 3 つのスーツケースだけを持って来た場合、何日かの間に、いったいどうやってその家を快適な家にすることができるのでしょうか？適切なつながりが、グーグルの 1000 以上のレビューよりも価値がある場所で、誰に助けを求めればいいのか？

オリムへの、フードカードやハイファハウスや他にもあるエベネゼルの支援は、彼らの生活に実際的な変化をもたらしています。神様は彼らをここに植えると約束されたのです。

彼らがイスラエルを安住の地とすることができるための支援ができるよう、神様が私たちを用いてくださるようお祈りしましょう。

私たちはネットワークを広げたいと思っています。もしオリムの支援をしている団体や人々をご存じなら、ぜひこの連絡先をお伝えください。haifahouse@ebenezer.org.il



Operation Exodus
Ebenezer Operation Exodus
International & UK Office
PO Box 9103, Bournemouth
BH1 9DA, UK
+44 (0) 1202 294455
enquiries@ebenezer-ef.org
www.operation-exodus.org



Operation Exodus USA
PO Box 568 Lancaster NY 14086
Phone: 716 681 6300
info@ebenezerusa.org
www.ebenezerusa.org

Operation Exodus



エベネゼル緊急基金日本支部

〒062-8691 豊平郵便局私書箱 37 号
Tel&Fax: 011-813-3558 (岡田)
paginamaestro@hotmail.com
http://eefj.org
郵便振替 (名称) エベネゼル緊急基金
(番号) 02710-0-55842

Operation Exodus (出エジプト作戦) はエベネゼル緊急基金の実際的な働き of 名称です。すべての国々からユダヤ人がイスラエルの地に帰還するように支援しています。彼らが約束の地に帰還するという神の計画と目的を宣言するべく 1991 年に 3 人の人から始まりました。

イギリス本部、アメリカ、スイス、ドイツを中心に国際的活動を展開し、さらにイスラエルを含めた 25 カ国に各国代表者と各国支部を配置しています。そして、旧ソ連諸国には実際的な働きのために、数多くの活動の拠点を設置しています。日本支部もその働きの一部です。